「大杉栄の旅」小感 ③

秋山

ば、どうしてもパリに行く必要がありますね、どうですか」。むろ なったとき、そのことで知りあったその記者さんにこういったこと がある。「思想史を歩く 時の「大杉の記事」の出た新聞記事を十以上も入手することが出来 定はなかったのだから、 ん私はそれが出来ると思っていったことではなく、先方もそんな予 ることであった。四月のある雨の日に、どさりと一束の新聞(ゼロ 十五、六歳の青年)の、自称阿竜(Y. M. Allioux)さんの好意によ フランス人の留学生(京都大学?に日本文学を勉強しに来ていた二 た。それは、やはり昨年の三月末と四月はじめに、二度だけあった フランス人のものとして、そういえたものではないと思った)日本 た。あけて見るとたどたどしい(ついそういったが、あとで一人の ックスした重いもの)が届き、その翌日一通の手紙が私の手に入っ 昨年の八月はじめ、朝日新聞の依頼で「大杉の旅」に出ることに 思わぬことで、パリに行ってフランスの警察につかまった それはそれなりのことであったが、今年に 大杉栄とアナキズム、ということであれ

「お元気ですか、日本ノ反抗反戦ノ現代詩に関心を持つフランスにおこくとを覚えていますか。あなたと歓談したのは、そしてまた人のことを覚えていますか。あなたと歓談したのは、そしてまたたのことを覚えていますか。あなたと歓談したのは、そしてまたたのことを覚えていますか。あなたと歓談したのは、そしてまたたのことを覚えていますか。あなたと歓談したのは、そしてまた人のことを覚えていますか。あなたと歌談したのは、そしてまた人のことを覚えていますが、日本ノ反抗反戦ノ現代詩に関心を持つフランスにおいています。

大、今日とのコピーを送ります。 とればすみませんでしてとになりました。三ヶ月をかかった! こればすみませんでしお勢にあるのでこの古い新聞からコピーするのはなかなか難しいいて調べた。けれども、仏という国は日本よりも経済的にいえばいて調べた。けれども、仏という国は日本よりも経済的にいえばいて調べた。けれども、仏という国は日本よりも経済的にいえばいて調べた。

明らかに表わしました。 驚くべきか驚くべからずか L' HUMA-う。LE FIGARO はもっとも反動的であって、いうまでもなくう。Le FIGARO はもっとも反動的であって、いうまでもなくー―いろいろの新聞があったから比較するのは面白 いでしょ

NITE という共産党の新聞には この事件については 全くなにも

のでおたのしみに。お元気でされてはいろいろ誠にありがとうございました。春すぐ来ます

二月二十八日阿

阿竜 (Y. M. ALLIOUX)

どろくが、雑談の中でふと私がもらした「一九二三年五月の、 スへ帰ったとか、聞いていた・ たかも今は忘れているが、私が朝日新聞に、「大杉栄の旅」の記事 の見方や考え方が、アメリカあたりの学者で日本文学にくわしいと すごした、その二度だけのことである。かなり日本の文学について 通訳してしばらく話したときである。その三、四日後にこんどは私 私はとまどってしまった。阿竜君と逢ったのは、昨年三月末上京し で大杉がつかまった時の新聞記事」ということを覚えていて、この ときから学んだのではあろうが、この手紙の意足る書き振りにもお をかいたのは、そのときから六ケ月程後であり、その頃彼はフラン いる。私がどこでどんな工合に、大杉の新聞記事のことをいい出し いう人などよりも、私らの思うことに近いと感じたことを記憶して が彼を案内して吉本隆明君を訪ね、菅沼瞭子さんの通訳で五時間も て、吉本隆明や秋山清に逢いたいとかで、多田道太郎さんが紹介し 面倒くさい調べを送ってくれたことには、どうお礼をいうべきか、 わずか一年半ばかりの京都の生活という、むろんフランスに居る パリ

はその新聞を二、三の知人にも見せ、そして吉本君を訪ねたとき同インクでしるしがつけてあり、といったほど行きとどいていた。私送られてきたフランスの新聞の写しは、大杉の記事のところに赤

その新聞は十一種に亘っている。

着いた。 「某月某日――どこをどうしてだか知らないが、とにかくパリに大杉の『日本脱出記』に、以下のようなところがある。

大きな通りになっている。てから名を聞いているオペラ座などのある大通りと同じような、てから名を聞いているオペラ座などのある大通りと同じような、れば『美しい町の通り』)と云うのだ。地図を開いて見ても、かねころは、パリの、しかもブウルヴァル・ベルビル(強いて反訳すてランス無政府主義同盟機関『ル・リベルテエル』社のあると

いずれその横町か屋根裏にでもいるだろう、と思って行って見ら万年町の方へ行く何とか云う大きな通りその まま の感じだ。ら万年町の方へ行く何とか云う大きな通りその まま の感じだ。ーール・リベルテェル社は、それでも、其の大通りの、地並の室にあった。週刊ル・リベルテェル(自由人)月刊ラ・ルビユ・アにあった。週刊ル・リベルテェル(自由人)月刊ラ・ルビユ・アにあった。週刊ル・リベルテエル(自由人)月刊ラ・ルビュ・アにあった。週刊ル・リベルテェル(社会書房)という小さな本屋もやってラ・リブレリ・ソシアル(社会書房)という小さな本屋もやってラ・リブレリ・ソシアル(社会書房)という小さな本屋もやってラ・リブレリ・ソシアル(社会書房)という小さな本屋もやって

ということである。大杉は、彼に世界アナキスト大会の通知をよこて、現在もなお、ル・モンド・リベルテエルの名で刊行されているとはわからないが、第二次大戦後 も 復活 し、いくらかの変遷を経して紹介されているからである。このリベルテエルは、戦時中のことはわからないが、第二次大戦後 も 復活 し、いくらかの変遷を経た、ル・リベルテエルという新聞のことが「アナキストの新聞」とたいうことである。大杉は、彼に世界アナキスト大会の通知をよこして紹介されている。大杉は、彼に世界アナキスト大会の通知をよこで、現在は、対している。

った、と自分で書いている。した同志コロメルを訪ねて、パリではすぐこのリベルテエル社に行

たことではっきりしているのは、上海を一月五日(一九二三年)に ない。ただ中国の同志らにきいていたフランス国の自由さというも てからマルセイユに着くまでのことは至って簡単にしか書かれてい の他に「パリの便所」「牢屋の歌」「入獄から追放まで」という各章 ことである。大杉の『日本脱出記』という本には、この「脱出記」 したかを、 から、彼が日本を脱出してから、どんな風にフランスのパリに到着 て、僕はそれらの人達にあてた上海の同志からの紹介状を持ってい れて、リョンに行った」「そこには僕の仮りの国籍の同志が数名い ルセイユに上陸して、或るホテルに着いた」「其の翌日マダムと別 て大杉はこの間のことについて「僕はマダム(N)といっしょにマ に着いたということだけである。四十日ほどかかっている。そし フランス汽船アンドレ・ルボンに乗って、二月十三日にマルセイユ くらか意外そうに書いているのが目につくくらいである。彼が書い のはすでになく、意外にきびしい諸般の取締りに遭ったことを、い を持った一中国人であったということであったが、それは当然であ 行での大杉栄は大杉栄でなく、すでに上海以来中国人のパスポート のだ」などと至って簡単にかいている。ここで分ることは、この旅 たのだ。そしてヨオロッパにいる間其の国籍の人間として通って行 くには、まずその同志のいろんな厄介にならなければならなかった 大杉の『日本脱出記』は読む人をあきさせないものだが、 もちろん夫々に面白い挿話を綴り込んでいるが、中国を出 (支那) がどんなに近代国家として不完全な統治下にあっ この『脱出記』を辿って知ることもなかなかにたのしい その中

たにしろ、フランスがどんなに自由の国であったにしろ、日本のアカランス政府による国外追放処分によるものだったが、大杉のの同じマルセイユから今度は日本の汽船箱根丸で出帆するまで、その同じマルセイユから今度は日本の汽船箱根丸で出帆するまで、その同じマルセイユから今度は日本の汽船箱根丸で出帆するまで、その同じマルセイユから今度は日本の汽船箱根丸で出帆するまで、その同じマルセイユから今度は日本の汽船箱根丸で出帆するまで、その同じマルセイユから今度は日本の汽船箱根丸で出りにしる、日本のアフランス滞在は百十一日ということになる。

林倭衛がパリで大杉に逢ったのは、三月上旬であったと「フランス監獄及法廷の大杉栄」(『改造』一九二四年六月号)でかいていた。また大杉との関係については、その同じ文章の中で「彼と初める。また大杉との関係については、その同じ文章の中で「彼と初める。また大杉との関係については、その同じ文章の中で「彼と初めて、カリズム研究会をやっていた。――僕は年齢からいっても彼より十歳の年少でもあり、――その後二年ほども経って、僕が絵を描くようになって、自然それまでの同志とのつき合も疎遠になって来た頃から、以前のように同じ主義、同志という意味をむしろ除いて、頃から、以前のように同じ主義、同志という意味をむしろ除いて、頃から、以前のように同じ主義、同志という意味をむしろ除いて、大正七年の二科展で問題になったこともあった。この時はそのて、大正七年の二科展で問題になったこともあった。この時はそのた、大正七年の二科展で問題になったこともあった。この時はそのた、大正七年の二科展で問題になったこともあった。この時はそのた、大正七年の二科展で問題になったこともあった。この時はそのた。

のその文章のなかにあった。
大杉も彼には余程心を許していたらしく、次のような会話が、林

『伊藤から手紙がついたかい』

こへ持って来ているが分るかな』とへ持って来ているが分るかな』のものとは知らないから、やぶって見たがどうも意味がよくとれのものとは知らないから、やぶって見たがどうも意味がよくとれば、月初めに着いたよ。ちょっと怪しいと思ったが、まさか君宛

藤野枝にいい置いたにちがいない、ということである。当をつけて、彼宛に連絡をするように」と大杉は日本を出る前に伊出をつけて、彼宛に連絡をするように」と大杉は日本を出る前に伊までは、

この林の、『改造』の文章の中には、フランスで大杉から林に宛またリョンにかえってドイツに行く許可をとったり、中にはこんなかセイユに出かけて、上海から同船したロシア婦人Nを訪ねたり、マルセイユに出かけて、上海から同船したロシア婦人Nを訪ねたり、マカーの大利のでは、フランスで大杉から林に宛ととも書いてある。

本郷駒込片町でいい。」 とうじゃない、必ずされるにきまっているのだから、アドレスはなら、その中に僕の事は一切書かないように。開封される恐れどなら、その中に僕の事は一切書かないように。開封される恐れど

く行って出発は来月の十日頃だろう。」ありさえすれば貰えそうな形勢だ。きょうその手続をする。うまのどがの方は、きょうのパリからの手紙によると、警察の証明が「ビザの方は、きょうのパリからの手紙によると、警察の証明が

なれば、それからオオストリ、スヰス、イギリスと大旅行をしてオランダへ出て更にドイツへはいる事になるかも知れない。そうら、僕はすぐ又パリへ行くかもしれない。都合ではベルギイからね、思いがけなくウチから金が来た。――それでそれが受取れた「パリからの返事を待っているうちに、それもまだ来ないんだが「パリからの返事を待っているうちに、それもまだ来ないんだが

来る予定だ。

中の糞だか、甘露の塊りだか何だか知らないが、踏めそうなら知らない。 君のような悪友がいないもんだからね。 異もバルビュス(共産党)とアナトル・フランス(共産党から、 こ人の比較評論を書いて見たいと思っているんだが、そ会って、三人の比較評論を書いて見たいと思っているんだが、それには三人の本を大分読まなければならんのでまだいつの事になるか分らない。パリからまだパスが来ない。リオンではまだ女を知らない。 君のような悪友がいないもんだからね。」

書いている。 世察できる。また林は、大杉について以下のような興味深いことも 世察できる。また林は、大杉について以下のような興味深いことも コンにいて、ベルリン行きのビザを待っていたことが、おぼろげに コンにいる。

フランスに居て後ち日本へ帰ってゆくという順序だった。」って彼の帰って来るのを待つ心組みだった。彼の予定は本年一杯り仕事に没頭するのだと云っていた。僕もその頃までリヨンに滞「彼はドイツの旅をすませたら再びリヨンに来て二三ケ月みっち

その頃大杉がリョンにいたのは中国の同志が大勢そこにいたとと、彼らの協力でドイツ行きのビザをそこから申請してそれを待っていたからである。しかしそれが中々下りない。大杉がやがて下りと、彼らの協力でドイツ行きのビザをそこから申請してそれを待っと、彼らの協力でドイツ行きのビザをそこから申請してそれを入れる。

発の用意が出来ていなかった。しかし彼はまだ明日にもビザが下い、ドイツ行の準備が整っている筈なのに、ビザは愚か、全然出「アンチーヴで受取った大杉の電報だと、彼はとうに ビ ザ を 貰

う存分に疑われているものと思わなければならない。 十日にもなる。そのうえ警視庁を離れ、 をしたがいつも一日で事が足りた。 りるもののように思っていたらしい。 密易に下りまいと思った。僕も幾度か外国行のビザを貰う手続 密偵局の方へ回され、 彼のは願出てから既に二 僕はこうなってはビザ 6

行ってみたが、何故に下ろきるりっ、・・・・地になって隔日くらいに密偵局へ足を運んだ。僕も二三度一緒に地になって隔日くらいに密偵局へ足を運んだ。僕はむしろ意 こから日本に送った。」 送った『日本脱出記』に手を入れ、僕の手を経てパリに回し、そ 彼は警視総監へ宛てて手紙を書いて出した。-総監へ宛てて手紙を書いて出した。 ――彼は改造に何故に下ろさぬのか、その理由が見 出 せ な かっ

近傍に、 ン河を船でアビニオン辺りまで下ろうじゃないか、アビニオンの 酒を傾け、彼の語るのを聴き、酔心地になると僕もよく喋った。 に列んだ、 陽の暮れまでもあるき回った。 「二人は地図を便りに、遠く郊外へ散歩に出かけた。ひる前から ある時彼はこんなことをいった。『ドイツから帰ったら、ロ ファブルの居たところがあるんだ、そこへ行って見た 不恰好なテーブルに向き合って、僕は幾杯となく葡萄 田舎屋のカフェの庭の樹の下

た。たといビザが下りても立てなくなった。」 「こうしている間にドイツ行の旅費を殆ど食い込んでしまっ

杉はパリの林に明朝着くと電報を打って来た。林が翌朝ガール・ド リオンに行って待ったが彼の姿は見えず、宿へか えって 見ると とうとうドイツ行のビザが下りないまま、四月二十九日の夜、

> じめた。 ついて、 部屋へはいって来て、汽車が早く着いて、行きちがいになったとい たといいながら、今度は目下つづいている裁縫女工のストライキに い、それでリベルテール社にメーデー集会の場所をききに行って来 外套と手提カバンとが置いてあった。大杉は午後になってブラリと 彼女たちの生活状態の詳細な統計などを示しながら話しは

> > 22

時頃)にやってきて、サン・ドニの集会に行くといっていっしょに が雑閙していた。 外に出て、別れた。よくはれた日で、祭日とあって着かざった人々 五月一日、大杉栄は林倭衛がまた寝ているうち(といっても十

いていた。 入って来た。「捕まったな」、姿を見た瞬間そう 思った、 の部屋に這り込んだが、やや亢奮気味の大杉もいっしょにつづいて 翌日の午後五時ごろ、人相のわるい男が五、六人、どやどやと林 と林は書

パリ郊外でつかまったときのことを大杉自身は「入獄から追放ま 」(『日本脱出記』)の中でこんな風に自分でかいている。

れようとするのに対する、 リアの同志サッコとヴァンツェティとがアメリカで死刑に処せら 会一つ位のもので、その他は皆郊外の労働者街で催された。イタ の屋内集会も、パリの市内では僅かにC・G・ の衝突を恐れて、出来るだけ事勿れ主義を執ったのだ。さればそ た。共産党の政治屋共や、C・G・T・Uの首領共は、警官隊と は許されてなかった。労働者のプログラムの中にもそれはなかっ ドニの集会で又会おうと云うことになった。メエデエの屋外集会 「リベルテエル社にコロメルを訪ねて、メエデエの当日、セン・ アメリカ大使館への示威運動ですら T・Uの本部の集

も、共産党はむりやりにそれを遠い郊外へ 持って 行ったの

る。大杉は「コロメルと集会がすんだらある打合せをする筈だった やラ・ルビユ・アナルシスト(無政府主義評論)の連中だ。がそれしそうにいう。「もういい加減に出ろ」と叫けぶ人はリベルテエル だやかな労働者祭に、じりじりしている彼の姿が見える ようであ びを演壇の上から叫びたくなった」と書いている。期待に反するお が、もうどうでもいいような気になった。この『そとへ出ろ』の叫 に応ずる声も出ない。演壇の上からしきりにその叫び声を制してい 々と説明された。聴衆の拍手は段々減って来る」と大杉はいまいま ぎるようだ。「当日のモットオが、 会館の外の様子はどうだったのか。会館の中の人数だけでは少なす の労働会館は、八百人の集まりだった、と大杉は書いている。その らでも肝に命じておきたい。その日のメーデーの集会場セン・ドニ 性格に大杉の不満の目が、 」と司会者に申入れて、 自由の国フランスの社会主義や共産主義の意外な面、その自由の 大杉はコロメルの次に「日本のメエデエについてしゃ べりた こんな風に向けられていたことは、今か やがて演壇に立った。こんな主旨であっ いやにおさまり返った雄弁で長

よく知っている。」 の数もまだ少ない。 「日本のメエデエはまたその歴史が浅い。それに参加する労働者 しかし日本の労働者はメエデエの何たるかを

での示威運動だ。」 それもホオルの中でではない。 「日本のメエデエは郊外では行われない。市の中心で行われる。 雄弁ではない。 公園や広場や街頭

「日本のメエデエはお祭り日ではない。×××××ー

のなかにかきこんでいる。 へ出たところで、四、五人の私服に彼は、そこでとらえられた。そ からのことを、つづけて彼はこんな風に、「入獄から追放まで」 「日本のメエデエ」について威勢よくしゃべって演壇を下りて外

引されたのだそうだ。警察の中ででもなぐったり蹴ったり、 は蹴られたり打たれたりして、その結果百人ばかりの労働者が拘 なって、ただ日本の同志だというだけで名も分らない僕を奪い返 た無数の警官が飛び出した。僕は警察の奥深く連れるまれた。 ったり、わめいたりする声が聞えた。)」 しに来たのだそうだ。そして警察の前で大格闘が始まって、女連 (これはあとで聞いた話だが、会場の中の十数人の女連が先頭に で多勢のインタナショナルの歌が聞えた。警察の中庭に潜んでい 「僕は手どり足どり難なく引っぱって行かれた。やがて警察の前

で警視庁へ行った。」 「翌日は朝早く二人の私服に護送されて、こんどは普通の自動車

人が、 された。そのあとで、いっしょに自動車で首実験に歩いた私服の一 きな傍の一室で、警視が「君は大杉栄と云うんだろう」と図星をさ やお神にたしかめさせ、そして警視庁へ帰って来ると、外事課の大 それから大杉が前にいたことのある下宿屋を連れ歩いて顔を主人

る小さな部分を指さして見せた。『数十名の負傷者あり』という文 句がちらりと見えた。又サン・ドニの僕の事に関する一段ぬきの記 といった。また大杉はその時、「共産党の日刊新聞リュマニテのあ 「日本でも、うんとメエデエをやったようだから安心したまえ」

介した阿竜さんの手紙とはちがっている。事も見えた」と記しているが、リュマニテのことは、最初に私が紹

う。 た、大杉がとらえられた時の新聞記事をふりかえって 見る と しよた、大杉がとらえられた時の新聞記事をふりかえって 見る と しよさて、そこで今年四月に遠くパリから、阿竜さんが届 けて ぐれ

フィガロ 一九二三・五・二

彼は、警察官の取調べにより、身分証明書の非合法なる事を認士の逮捕の結果、かなり激しい競合いが行なわれた。――サン・ドニでは、会場で熱烈な演説をぶった中国国籍の一闘

五百人から六百人のグループは、二人の市会議員を先頭に、こめた。

五百人から六百人のグループは、二人の市会議員を先頭に、こ五百人から六百人のグループは、二人の市会議員を先頭に、こ

負い、デモ隊員のうち三名が逮捕された。

修察と車方されて収開さなどころ、トウン・チェン・マタン、オリビエ、マルリエがその三名である。

散を促しても効めはなかった。署長は市会議員ラポルトと談判、大きなこ十八歳の日本の新聞記者は、パリに於ける住所を明らかに乗る二十八歳の日本の新聞記者は、パリに於ける住所を明らかに乗る二十八歳の日本の新聞記者は、パリに於ける住所を明らかに乗るまで認められないことになった。コロメルはそこでレジオン・ドヌール街の会場に戻り、事の次第を告げた。十五分後、約ン・ドヌール街の会場に戻り、事の次第を告げた。十五分後、約シ・ドヌール街の会場に戻り、事の次第を告げた。十五分後、約シ・ドヌール街の会場に戻り、事の次第を告げた。署長が解している。

員は武装を余儀なくされた。

エクセルシオール 一九二三・五・二

パリで十四人検挙―

……一方サン・ドニのレジオン・ドヌール街の会場で行なわれたの処置に委ねられた。同件は、今日外事課にま わ され る筈であの処置に委ねられた。同件は、今日外事課にま わ され る筈である。

ル・プーブル(サンジカリズムの日刊紙)一九二三・五・二、3トニ5ト

――郊外における乱闘

……会合中、発言した中国人チン・シェンが逮捕された。

ル・タン 一九二三・五・三

――サンジカリストのメーデー

ったが、乱闘さわぎが見られた。

あった。
あった。
ないの釈放を要求した。彼等の先頭は市会議員達であった。

ばれた。警察官五人が打撲傷を負い、負傷したデモ隊員一人が病院に運

ル・プチ・パリズィアン
一九二三・五・三

――郊外のメーデー

モにより、警察との小ぜりあいに及んだ。れた。平穏に閉会されたが、その後警察署の前で行われた抗議デれた。平穏に閉会されたが、その後警察署の前で行われた抗議デ

開会中日本人弁士の発言がみられた。

エクセルシオール 一九二三・五・四

予審における一日本人――

同氏は国外追放の対象となるであろう。関する調査にヨオロッパに来ており、中国人として通していた。オスギ氏は、自称トゥン・シェン・タン、アナーキズム運動にオスギ氏は、自称トゥン・シェン・タン、アナーキズム運動に は頭で演説をした際捕えられた日本

フィガロ 一九二三・五・四

――起訴される日本人ジャーナリスト

罪、警官侮辱罪に関する弁解をしなければならない。
お証明書を所持していなかったサカイ・オスギ氏、自称トゥン・シェン・タンは、昨日追放命令を通告された。
しかし国外に出される前に予審判事ヴァラン氏に、秩序紊乱しかし国外に出される前に予審判事ヴァラン氏に、秩序紊乱しかし国外に出される前に予審判事ヴァラン氏に、

キスト大会に参加する予定でいた。この日本人闘士の場合、心あ来ていた。同氏は数日間リョンに滞在しており、ベルリンのアナサカイ・オスギ氏は無政府主義運動の調査のためヨオロッパに

ている。

る人の同情をかう事はなさそうだ。

ル・プチ・パリズィアン 一九二三・五・四

メーデー以後

官侮辱罪による検挙を報じた。

り、後予審判事ヴァラン氏により告訴された。 検事局に連行された新聞記者は、本名をソカエ・オスギと名乗

論争ジャーナル 一九二三・五・八

郊外

・リベルテール (週刊) 一九二三・五・一一

――メーデーの教訓

たのは、まず婦人たちであった。
動者と社会情勢を五、六百人のフランス人労働者の前で説明した。
か、それを罪として彼を監禁した警察署の襲撃に立ち向って行っが、それを罪として彼を監禁した警察署の襲撃に立ち向って行っ

25

めて進んだのである。 婦人、子供、老人等は、大胆にも、 この日本の同志の釈放を求

当局は、 警棒と砂とで彼等に応えたのだ。

エクセルシオー 一九二三・五・二五

造であった。 視庁に何らの申告もしてなかった事実が判明し、 立てていたところを検挙された。身分証明書を調べたところ、 アンで開かれた共産主義者の会合に出た後、 本人ジャー ナリスト、サカテ・オズギは五月一日、 街頭で大声でがなり パスポートも偽 サント 警

三週間を申し渡された。 第二軽犯罪裁判所に召喚されたサカテ・オズギ氏は、 昨日禁錮

を要求した人々があったということは、彼にも始めての経験であっ 二、三十分の「日本のメエデエ」について語ったとき「四十がらみ であっ と人種差別などわけもなく乗りこえて、 が目にも耳にもはいった」と彼も書いていたが、彼のために、 の女が『セエサ、セエサ』(そうです、そうです)と叫んでいたの あたらしくすべきものがある。 捕されたその日における警察前のさわぎというものは、確かなこと 見えるが、大杉が後の「入獄から追放まで」の中でかい 五十年以前のこれらフランスの新聞記事にもそんなスタイルがよく 新聞記事というものには、どこか虚実とりまぜたところがある。 た。女たちが先頭に立って抗議行動ということにも、思いを あるいは、 彼の多分に冒険を伴ったフランス渡航、 サン・ドニの集会で彼がわずか 肉体を張ってまで彼の釈放 た、 彼が逮 国籍

> 月に渡る旅行の、 その翌日、つまりメーデー その時がクライマックスであったともいえようか

けたことを、彼はこんな風に語っている。 て、日本人大杉栄なることが確認ざれてから、綿密な身体検査を受 の翌日は、日本大使館からも人が来

その翌日、 面に向くまでの間の全瞬間を活動式にとる仕掛になっていた。」 た。写真も、横向になって椅子に坐ると其の椅子が回転して、正 が、フランスではさすがもっと科学的に、頭蓋の大きさや長さを 人類学的に調べた。そして指を延した手と前腕の長さまでも計っ 「日本の警視庁では身長や体重を計って指紋をとる位のことだ 五月三日の朝、 大きな囚人馬車でラ・サンテの監獄に

(一九七四・九・二九)

る。

有名な「魔子よ、

送られた。そして六月三日にマルセイユから追放されるまで、彼の

魔子」という詩などをそこで書いたりしたのであ

ヒュ

金 井新作 の第二詩集

変わることのない見事さである。 期を通して、弱者への連帯、反戦、反権力の詩人の姿勢はまったく 四年)から一九六九年(昭和四四年)に及ぶ、殆んど半世紀にわた る作品がこの詩集に収められているが、その間、暗い長い戦争の時 「題を忘れた絵」についての私の感想である。 マニストの詩集、 というのが金井新作の第二詩集 一九二五年(大正一

を拒否するのは困難である。当然、戦争を謳い上げるような側面を 国を挙げて戦争という時勢ともなれば、自己の保存のためにも時流 を持し続けたのは『私は詩を作ることを主な仕事として来たのでは 彼が、時流に同調して脱落していった詩人の多い中で、固くおのれ 太いとは思われない。むしろ若くて抒情的ですらあるのだが、その であった。 もつ。金井はそうではない。 らであろう。ふつう、詩人は詩を書くのを仕事だと考える。だから なくて、思想的の内的追求を自分の使命と考へて来た』(後記)か 金井新作のヒューマニズムは、硬骨ではあるけれど、 時流は彼が感じ、 考え、彼のヒューマニズムを確かめて 詩はおのれの思想を深める一つの方法 決して骨が

> き方といってもいい。何れにせよ、 ゆくモメントであった。 モメントという云い方がおかしければ、 時勢の不条理に屈服同調しない

清

清

る 頑固さが金井の詩のバック・ボーンである。 詩集の最初の作品に「まるけの絵を見て」と題する次 0 詩が

落日の桟橋の、散歩者の群よ-みんな寂しさうにしてゐるな。

影の散歩者は動かない。

みんな深い傷を心に秘めてゐるやうな人達だな 太陽は悲哀の光芒を長く垂れて、まっしぐらに沈んで行く

人生は寂しい。

みんな温かい抱擁を求めて、やって来たんだらうに、 何だって、みんな黙ってゐるんだ! みんな悲しみを打明けようとして、やって来たんだらうに、 みんな離ればなれだ。

き、話して呉れ!
悲しい話でも好い。寂しい話でも好い。

みんな、動かない。

ああ!真黒な、運命の旗!
日が沈めば、闇に消えてしまふのだ。
はの音が高くなったな。
風も烈しくなったな。

ト・ホイットマンを憶ふ」という詩がある。野戦病院の看護夫とし ト・ホイットマンを憶ふ」という詩がある。野戦病院の看護夫とし ト・ホイットマンを憶ふ」という詩がある。野戦病院の看護夫とし ト・ホイットマンを憶ふ」という詩がある。野戦病院の看護夫とし ト・ホイットマンを憶ふ」という詩がある。野戦病院の看護夫とし た正代一昭和初期を思えば、当時のこの詩の素朴な手法は一般的で をが直ちに悪いのではないが、問題は最近の作品に到るまで変化、 とが直ちに悪いのではないが、問題は最近の作品に到るまで変化、 とが直ちに悪いのではないが、問題は最近の作品に到るまで変化、 とが直ちに悪いのではないが、問題は最近の作品に到るまで変化、 とが直ちに悪いのではないが、問題は最近の作品に到るまで変化、 とが直ちに悪いのではないが、問題は最近の作品に到るまで変化、 とが直ちに悪いのではないが、問題は最近の作品に到るまで変化、 とが直ちに悪いのではないが、問題は最近の作品に到るまで変化、 とが直ちに悪いのであるうか。「日米戦争のさ中にあってウオル けれる。ヒューマニスト金井は、太平洋戦争のさ中にあってウオル ト・ホイットマンを憶ふ」という詩がある。野戦病院の看護夫とし

て『胸に貯えられた、広大な愛』をもって働くホイットマンを描きて、私は、硝煙弾雨の彼方に屹立する、巨大な、貴方の映像を見詰て、私は、硝煙弾雨の彼方に屹立する、巨大な、貴方の映像を見話だけではなく、社会事象への対応の仕方も、金井の詩は半世紀を同じ歩様で歩いている。金井の詩の弱点だと私は思う。後戻りはしないが、詩はうまくなっていない。衰えぬことだけをほめるわけにはいかないであろう。「エゴイスト」という詩では『信仰と努力とに依って、存在の宿命から脱しようとはせず、宿命そのものを肯定することに依って、彼は存在の自由を見る』といっているが、個人主義に対する彼の永遠の憧憬ではなかろうか。この詩のような観念詩が、収められた四二篇中に数篇あるが、思想は語っているものの詩が、収められた四二篇中に数篇あるが、思想は語っているものの詩としては成功していない。

金井の古い友人である秋山清は、跋文「沼津に訪う」に

『――人はどうかんがえようと、現代の年少詩人らが何を見ようと、金井新作は長い長い二十世紀の前半から後半へかけて、素朴でと、金井新作は長い長い二十世紀の前半から後半へかけて、素朴でと、金井新作は長い長い二十世紀の前半から後半へかけて、素朴ではかった』

る』という前書きがついている。 を、書いている。この一冊の詩集の大筋の批評はこれで尽きてい と、書いている。この一冊の詩集の大筋の批評はこれで尽きてい と、書いている。この一冊の詩集の大筋の批評はこれで尽きてい

△護送されてゆく囚人の群>

サーベルと靴と草履の音がす早く動いて行った。みんな、不思議な息苦しさにしんとしてゐる中を、

囚人達を珠子繋ぎにした青い紐は、ピストルの男に握られて る手にはがっちり手錠が嵌められてゐた。囚人達は深編笠を被って青い着物に包まれてゐた。

150

サーベルと靴と草履の音がす早く動いて行った。みんな不思議な息苦しさにしんとしてゐる中を

△薄 化 粧ン

姿は俺を泣かせる。 を見ている。心の中には、複雑な想ひが渦巻いて ゐ る だらうを見ている。心の中には、複雑な想ひが渦巻いて ゐ る だらうお前は床に坐って、じっと俺を見つめてゐる。俺も黙って、お前

妻よ! 死なないで呉れ!

(発行所・沼津市山神道四一―一瀛詩社・A五版八三ページ。一五〇〇円)

直接購読のすすめ

『黒の手帖』は定期刊行の雑誌ではない。文字通りの不定期刊行物である。別記の書店を除いては、市販していない。だから、『黒の手帖』を確実に入手するには、二号分あるいは四号分前金払い込みで直接読者になるのが一番である。

『黒の手帖』は広告を一切取らない方針である。理由は、広告を取る煩わしさにかかわりたく ない ため由は、広告を取る煩わしさにかかわりたく ない ため 古が口伝てで『黒の手帖』の存在を知らせて、直接購者が口伝てで『黒の手帖』の存在を知らせて、直接購着となることをあえてお願いしたい。

◆『黒の手帖』取扱書店◆

東京=文献堂、ウニタ書舗、吉祥寺ウニタ、文泉堂、東京=文献堂、ウニタ書舗、吉祥寺ウニタ、文泉堂、東京=文献堂、ウニタ書舗、吉祥寺ウニタ、文泉堂、東京=文献堂、ウニタ書舗、吉祥寺ウニタ、文泉堂、東京=文献堂、ウニタ書舗、吉祥寺ウニタ、文泉堂、

29